

Card Magic Magazine



No. 22

February 14, 2014 by Hideo Kato

カードマジック徹底研究

ホテルミステリー

Part 1 'ホテルミステリー' のプロット

まず最初に、'ホテルミステリー'とはなんぞや、ということを確認しておくことにいたしましょう。出発点として、“Card Magic Library”第2巻、149ページで解説済みの、デヴィッド・ソロモンの'ホテルモーテルホリデイイン'の現象を引用します。

ホテルの2つの部屋に、女性が1人ずつ入ったと言って、Qを左と右に1枚ずつ置きます。それぞれの部屋に2人の男性が入っていったと言って、左右のQの上にKを2枚ずつのせます。ホテルの警備員が2つの部屋を確認すると、一方の部屋に2人の女性がいて、他方の部屋に4人の男性がいます。この現象がもういちど繰り返されます。

というものでした。物理的に見れば、aとbという異質なものを1カ所に置き、別のaとbを別の場所に置くと、1カ所にaが集まり、他方にbが集まる、と表現できます。アンチオイル&ウォーターの現象の親戚のようなものですが、配列の中で移動するのではなく、2つの場所の間で移動現象が起きます。トランスポジション現象のうちの一つであるといえます。

このように物理的現象を表現するのに適切なストーリープロットは、同じ場所にはならないものが分離して、同じ場所にいるべきもの同士が集まるということの象徴として、男と女、狼と羊、異なる人種など、色々な組み合わせが使われてきました。

そのプロットの先駆けとして、しかも話の中にホテルの部屋が語られるものとして、私が見つけたものでもっとも古いものを最初に解説いたします。ただし、これは手法的には、今日において'ホテルトリック'と呼ばれる一群のものとはたいへんかけ離れています。

ある夜の宿屋の出来事

(原題: Like with Like, or How to Keep a Hotel)

= W.H. クリーマー、"The Secret Out"、1859年 =

すべてのAと絵札を抜き出します。それから適当なカード1枚を抜いてテーブルに置き、「このカードがホテルだとします」と言って、つぎのような話を語ります。

「ある暗い夜に4人の農夫がやってきて、一晩泊めてくれと言いました。その晩は他に客がいなかつ

たので、ホテルの主人はそれぞれの農夫に部屋へ案内し、自分はすぐベッドへもぐり込みました。(このセリフに合わせて、ホテルカードのまわりに4枚のJを置きます)。

「すると間もなく、4人の警官がやってきて、やはり泊めてくれと言いました。他に空き部屋はなかったので、警官を1人ずつ農夫の部屋に泊めることにしました。(ここでそれぞれのAをそれぞれのKの上ののせます)。

「さらに4人の男性がやってきて泊めてくれと言いました。主人は困りましたが、しかたなくすでに2人ずつ入っているそれぞれの部屋に1人ずつ案内しました。(それぞれのパイルにKを置きます)。

「ここまではなんとかうまくいきましたが、このあとやってきたのが4人の女性客です。主人ははたと困りました。どうとでもなれと、彼は女性も1人ずつそれぞれの客室に案内しました」。(それぞれのQをそれぞれのパイルの上に置きます)。

「女性客は怒りました。“同じ仲間をそれぞれの部屋に集めることはできないの”と主人にせまりました。主人は困りましたが、何とかしなければなりません。「そこで主人はこのようなことをやりました」と言って、4つのパイルを重ねてから、全体を相手に何回かカットさせたあと、4つのパイルに配って分けました。

その結果、警官、農夫、男性、そして女性が4人ずつそれぞれの部屋に集まったのを見せます。

備考

じつに素晴らしいプロットだと思います。現象そのものは、現代の'ロイヤルアセンブリー'的ではありますが、同類が集まる理由が面白いですね。

ところで1859年の文献をどうして入手できたか、と疑問を感じませんか。これこそインターネット時代でしかあり得ないことです。マジックカフェで'ホテルトリック'が話題になったとき、あるメンバーが"The Secret Out"の該当ページをスキャンして提供してくれたのです。

そしてマジックフォーラムやマジシャンのブログなどには、私が見過ごしてきたような、重要なことを取り上げていることが多々あります。それらを読ませていただき、さらに自分で追求を深めることによって、今回のようなひとつのトリックを深く研究するということが可能になったのです。

先日、タンザニアの金の採取についてテレビ番組がありました。貧乏な人々は、大企業が採取して捨てた土をまた掘り起こして、微量な金を集めているとのことでした。微量なものも集めれば価値のあるものとなります。皆様もぜひ、ひとつひとつの作品からだけでなく、それらを集めてひとつの形にまとめたことから、価値を感じていただければ幸いです。

Part 2 '狼と羊' タイプ

この Part で考察するのは、今日の 'ホテルミステリー' のように技法を使うのものではなく、観客の勘違いを利用する心理的手法による、'Thieves and Sheep' として有名なものです。時代は前後しますが、ウォルター・ギブソンの書いたスタンダード版を先に紹介します。

狼と羊

= ウォルター・ギブソン、"Magic as a Hobby", 1958 年 =

もともと 'Thieves and Sheep' は古典的なコインマジックであり、J.B. ボボの "Modern Coin Magic" (1952 年) にも書かれています。それを最初にカードマジックに置き換えたのが誰で、いつのことかはまだ確定できていませんが、ウォルター・ギブソンが書いているのを見つけましたので、原文を翻訳して収録しておきます。

この驚くべきトリックでは、3 枚の数のカードが左の帽子から右の帽子に飛行し、1 枚の絵札が右の帽子から左の帽子に飛行します。

2 個の帽子が空であることを見せて左右に置き、それらが小屋であると説明します。J を 1 枚ずつそれぞれの帽子に入れます。それらは密かに獲物を待ち受ける泥棒だと説明します。つぎの数のカード 5 枚を見せて並べ、それらが羊だと説明します。泥棒が羊を盗んで、1 引きずつ小屋の中に連れていくと言って、数のカードを帽子の中に、左、右、左、右、左と入れていきます。

人が来る気配を感じたので、泥棒は羊を中庭に逃がしました、と説明して、右、左、右、左、右の順で帽子から 1 枚ずつカードを出します。でもすぐに人が行ってしまったので、また羊を小屋に入れましたと言って、カードを左、右、左、右、左と帽子に入れます。

ここでジョーカーを取り出し、それが小屋を調べにきた農夫であると告げます。でも泥棒は羊を盗んだのを見つけることはありませんでした。5 匹の羊は全部左の小屋にいて、と言って右の帽子から数のカードを 5 枚出して見せます。左の小屋には 2 人の泥棒がいました、と言って、左の帽子から 2 枚の J を出して見せます。

このトリックは以上のように進めれば、自動的にできます。ただし、羊を小屋から出すと言って右の帽子からカードを出すとき、そのうちの 1 枚は J を出すのです。左から出す 2 枚のうちの 1 枚も J を出します。そしてまた左、右、左、右、左と入れるとき、2 枚の J を右の帽子に入れるのです。

交換現象の起こり方としては、今日の 'ホテルミステリー' とそっくりです。むしろ同一と言ってもよいでしょう。羊が女性に置き換えられ、泥棒が男性に置き換えられ、はたまた農夫がホテルの警備員に置き換えられ、'ホテルミステリー' は人間版 'Thieves and Sheep' なのです。

ジーマン

= アーサー・メロ、“Jinx” 1937 年夏特別号 =

“Thieves and Sheep” の作品として、1958 年に書かれたギブソンのバージョンを先に紹介いたしました。それより以前にこの方法が存在していました。先に書かれた方をあとから紹介する理由は、ギブソンの方法が基本的なやり方であり、こちらの方が要素が多く、本来なら基本的なものが先にあって、発展形があとから出てくるものですが、その逆の現れ方が珍しいので、この順で紹介することにいたしました。

* 方 法 *

5 枚の赤裏カードと 2 枚の青裏カードを使います。(訳注：原著では表面については指摘されていませんが、赤裏も青裏も似たような大きい数のカードを使った方がよいと思います)。

最初にズボンの左と右のポケットが空であることを、客にチェックさせます。

「この 2 枚の青裏のカードはジーマンの役のカードです。1 人のジーマンがこちらのポケットに入っていく、もう 1 枚がこちらのポケットに入ってきました」と言って、青裏のカードを左右のポケットに入れます。表面を外側に向けて入れます。5 枚の赤裏のカードを見せて、「これらの赤裏の 5 枚は、秘密を持った男たちの役のカードです」と言います。

ある日、5 人の男たちは、お互いの秘密を交換することにいたしました。そこで 2 つの部屋に集まることにしました。でもその部屋には、あらかじめ彼らが集まることを察知していた、ジーマンが待ち受けていました」と言って、赤裏のカードを 1 枚ずつ、右、左、右、左、右のポケットに入れていきますが、表を外側に向けて入れます。つねに青裏カードの手前に入れます。

いま右のポケットに 4 枚、左のポケットに 3 枚入っています。それらのいちばん前にあるのは青裏のカードです。

「ジーマンが彼らを捕まえると、彼らは 5 人ともマジシャンだと言いました。しかたなくジーマンは彼らを放免しました」と言って、左、右、左、右、左、とポケットからカードを出して表向きにテーブルに置きますが、1 枚目と 2 枚目でジーマンカードを出します。

いま、右のポケットに赤裏のカードが 2 枚あり、テーブルには 5 枚のカードが表向きに置いてあり、そのうちの最初の 2 枚が青裏です。

「しかしジーマンは彼らがマジシャンを装っていただけだと考え、もういちど捕らえることにしました」と言って、右手で赤裏の 1 枚を右ポケットに入れます。左手で青裏のカードを左ポケットに入れます。右手で赤裏の 1 枚を右ポケットに入れ済ます。左手で青裏のカードを左ポケットに入れます。

右手で赤裏の 1 枚を右ポケットに入れます。

「結局のところ、彼らはマジシャンだったのです。その証拠に彼らはエスケープはお手のものです。全員こちらに集まっています」と言って、右のポケットから 5 枚出して、全部赤裏であることを見せます。

「何とジーマンはこちらの部屋に取り残されました」と言って、左のポケットから 2 枚出して、青裏であることを見せます。

* 備 考 *

裏面の色違いを使っていながら演技途中で裏面は見せず、最後だけ見せるという点は、いっけん弱点に思えるかもしれませんが、あながちそうではないと思います。そもそも 'Thieves and Sheep' はコインマジックで成立していたものですから、カードの表面だけを見せて演じて、5 枚と 2 枚に分かれたときの不思議さは成立するはずです。

ですから最後に裏面を見せるのは、たしかに狼と羊に分かれていたという、現象をより明確に表現する働きをしています。

その考え方をモディファイするアイデアがあります。それは裏面は全部同じ色の同じ模様として、表面に狼の描いた 2 枚と、表面に羊を描いた絵枚とを使って、上記のようなやり方をすることです。カードを入れたり出したりするときは、裏面を観客に向けてやるのです。

もちろん、ダブルフェースを使うというやり方もあります。どこかで読んだ気がします。今回の調査では出典を見つけられませんでした。その原理を発展させたものに、気賀康夫氏の傑作、'兎と狼' (" 奇術研究 " 第 17 号、1964 年 4 月) があります。

狼と子豚

= 変案 : 加藤英夫、2001 年 7 月 25 日 =

テクニック不要の 'Thieves and Sheep' にあえてテクニックを取り入れるとどうなるか、そんなことに挑戦してみました。スタンダードなやり方にただハマンカウントを加えたのですが、従来から、トリックからテクニックを省けば省くほど改良される、という教えがありましたが、その反対の場合もあると、私は思います。

* 方 法 *

このマジックには、B5 ぐらいの大きさのノートとか厚紙が 2 冊もしくは 2 枚必要です。厚紙を使うこととして説明します。

厚紙の裏表を見せてから、テーブルに左右に 20cm ぐらい離して置きますが、手前の端をテーブルの端から少しはみ出させて置きます。

デッキを表向きに広げて、黒い J を 2 枚抜き出してテーブルに置き、これがこれからの話の中で狼の役を演じると説明します。赤い 6 とか 7 とか 8 を 5 枚抜き出して、2 枚の J の上に表向きに重ね、それからが子豚の役を演じると説明します。

デッキをわきに捨てます。7 枚を取り上げ、「子豚は 2 軒の家に住んでいました」と言って、左の厚紙の手前端を持ち上げて、フェースから 1 枚の赤いカードを取り、裏を上にしてその厚紙の下に入れ、厚紙を下げます。つぎの赤いカードを同様に右の厚紙の下に入れます。以下同様、あと 3 枚の赤いカードを左右交互に厚紙の下に入れます。入れたカードはそろうようにします。

「2 匹の狼がやってきて、それぞれの家の中に入りました」と言って、1 枚の J を裏を上にして左の厚紙の下に入れますが、他のカードより前方に置きます。もう 1 枚の J を同様に右の厚紙の下に入れますが、やはり他のカードより前に置きます。

「子豚は驚いてあわてて家から飛び出しました」と言って、右の厚紙を持ち上げて、1 枚の赤いカードを抜き出し、裏向きのまま厚紙と厚紙の間に置きます。左の厚紙の下から 1 枚の赤いカードを抜き出して、中央の赤いカードの上に重ねます。つぎは右から赤いカードを抜き出して、中央のカードの上に重ねます。つぎは左から前にずれている J を抜き出して、中央のカードの上に重ねます。つぎは右から前にずれている J を抜き出して、中央のカードの上に重ねます。

中央に重ねた 5 枚を取り、表向きに持ってハマンカウントを行い、赤いカードが 5 枚あるように見せます。そのあと 5 枚を裏向きに持ちます。そのうちトップの 2 枚は J です。

「狼はずるがしこいので、家の中にあつたクローゼットの中に隠れました。しばらくして子豚は家のをぞきこんで、狼がいなくなっているの、また家の中に入っていました」と言って、右からスタートして、手に持っているカードを交互に厚紙の下に入れていきますが、右の方に入れるときは、手に持っているカードのボトムからカードを取ります。左の方に入れるときは、トップから取って入れます。

以上の結果、右の厚紙の下には 5 枚の赤いカードが、左の厚紙の下には 2 枚の J があります。「そのあとどうなったでしょうか。心配しないでください。これは不思議な国の話ですから」と言って、厚紙をどけて、右に 5 枚の赤いカード、左に 2 枚の J があることを見せます。「というわけで、子豚は無事でした」と言って終わります。

Part 3 4対4タイプ

ホテルミステリー

= エドワード・マルロー、“Let's See the Deck”、1942年 =

マルローはこのトリックの前書きで述べています。“このトリックはマーチン・ガードナーが見せてくれたものですが、“Jinx” No.74 にヘンリー・クリストが類似のトリックを書いています。クリストの方法では4枚のAと4枚のKを使っており、技法はボトムチェンジを用いています。両者を比較したとき、皆さんはこちらの方法がはるかに優れていることがわかるでしょう”と。

* 方法 *

「Qは女性、Kは男性です」と言って、デッキから4枚のQと4枚のKを抜き出します。Qを先にデッキのトップに置き、その上にKを置きますが、上から3枚目のKの下にブレイクを作ります。「いちばん上は女性ですか、それとも男性ですか」とたずね、相手が答えているうちに、ブレイク上の3枚を1枚として「1枚」と数えて取り、その上にあと3枚数えて取ります。

右手のカードのフェースのKをちらっと見せ、トップカードをプッシュして右手のカードで表向きに返し、Qであることを見せます。トップの2枚をプッシュして、右手のカードで2枚をいっしょに返します。初めのQは裏向きになり、つぎのQが表向きになって現れます。そのQを裏向きに戻します。左手のポケットがQのポケットであることを再確認したわけです。右手のカードをトップにのせます。

「これはあるホテルでの出来事です。ここに3つの部屋があると考えてください」と言って、テーブルの左、中、右を指さします。4人の男性がこちらの部屋に泊まりました」と言って、トップから4枚を左のポイントにディールします。「4人の女性はこちらの部屋に泊まりました」と言って、中央のポイントにつぎの4枚をディールします。

「ところが女性のうちの2人が、なぜか別の部屋を借りました」と言って、中央のポケットの上の2枚を右のポイントに移します。「こちらの部屋から2人の男性がこちらの部屋に入りました」と言って、左のポケットの上から2枚取って、中央の2枚の下に差し込みます。「そしてあとの2人の男性は、こちらの部屋に入りました」と言って、左の2枚を右の2枚の上にのせます。

「そして部屋の中でこんなふうになんかありまして」と言って、左右の手を2つのポケットの上におせて、カードをもむような感じで動かします。「ちょっと部屋の中をのぞいてみましょう」と言って、カードをすべて表向きにします。KとQが4枚ずつ分かれています。「いったいぜんたいどうなっているんでしょうね」と言って終わります。

* 備 考 *

マルローが原点として指摘している“Jinx” No.74 の、ヘンリー・クリストの作品をチェックしましたが、物理的現象は関係がありますが、ホテル云々のストーリーは含まれていませんし、ストーリーそのものが書かれていません。しかもハンドリングがまるで違います。

それだけクリスト作品とは違いますから、わざわざクレジットする必要もないぐらいですが、マルローは影響を受けた作品に対しては、クレジットにこだわったのでしょう。マルローの弟子のデヴィッド・ソロモンは、晩年のマルローは記憶違いが多くなったと述べています。その点とマルローのクレジット癖が、多くのマジシャンと論争を生み出したのではないのでしょうか。

さて、ホテルでの男と女の出来事というストーリーは、1859年のクリーマーが書いたトリックに存在していましたが、今日‘ホテルミステリー’というと、よくこのマルロー作品が原点であると指摘されます。

ホテルの話を取り入れた作品は、W.H. クリーマーが書いたものが1859年にありました。マルロー作品は4枚のKと4枚のQを使用しますが、2枚のKと2枚のQで物理的にはほとんど同じ現象のものは、“Genii” 1941年9月号中の、ジェラルド・カウフマンのThe King Can Do No Wrong という作品がありました。

にもかかわらず、エドワード・マルロー作品が原点と言われる理由は何でしょうか。それはマルローが初めて‘ホテルミステリー’というタイトルを使ったことに他なりません。じつはあるトリックが有名になるのには、適切なタイトルが現れたのがきっかけになった、ということがかなりあります。

‘オイル&ウォーター’の現象はそれまでに存在していたのに、マルローが初めて‘オイル&ウォーター’というタイトルを使ってから有名になりました。複数版サンドイッチトリックは存在していたのに、ロイ・ウォルトンが‘コレクターズ’というタイトルで発表したときに‘コレクターズ’は有名になりました。

そのような傾向があるのはしかたないかもしれませんが、カードマジックを文化として継承していくには、タイトルの発案者だけではなく、関連した知識を体系的にまとめて残すことが重要だと思います。

以上まで書いたあとに追加すべきことが見つかりました。1923年に発行された、Frank La Fontaine 著、“Sealed Book : 50 new card secrets” 中に‘Hotel Trick’というのがありました。トリックとしては、W.H. クリーマーが1859年に書いた“The Secret Out”の中の、‘Like with Like, or How to Keep a Hotel’とまったく同じでした。‘Hotel Trick’というタイトルは有名にならず、‘Hotel Mystery’が有名になるのですから、タイトルのつけ方も大切だということです。

5 番目のホテルミステリー

= ニック・トロスト、"Nick Trost's Subtle Card Creations Vol.2", 2009 年 =

トロストはこのバージョンが、2000 年発行の "Virtual Miracles" に解説された、ジーン・メイズの 'ピーピングトム' を簡略化したものと述べています。

メイズバージョンを確認したところ、それはウェッジムーブ、ボトムディール、セカンドディールを駆使するという、超テクニックオリエンテッドなバージョンでした。技法を多く使えば使うほど、見た目が煩雑になるという典型的な例です。簡略化の名人ニック・トロストならずとも、すぐに簡略化の方法を考えたくならないと思います。

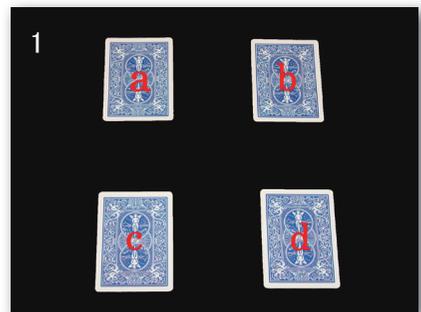
* 方 法 *

つぎのカードを抜き出します。表向きで上から、QC、QH、QS、QD、KC、KH、KS、KD、JS とします。残りのカードは使いません。

パケットを裏向きに左手に持ちます。スペードのJをわきに置きます。パケットを表向きに返し、右手のビドルグリップに持ちます。4枚のQを左手に引いて取りますが、3枚目のスペードのQを取ったとき、下にブレークを作ります。そしてダイヤのQを取ったところで間をとります。

つぎにクラブのKを取るとき、右手のカードの下にブレーク上の2枚のQをスチールします。そしてハートのK、スペードのKと取り、2枚のカードが隠れているダイヤのKを左手のカードの上に置きます。

パケットを裏返します。上の4枚が4枚のQだと思われています。「4人のQがホテルの4つの部屋に別々に入りました」と言って、テーブルに図1のa、b、c、dの順に置きます。最初の2枚は表をちらっと見せられます。



「4人の男性はそれぞれ女性の部屋に入ることにしました」と言いながら、トップカードを押し出して、図2の状態です。左手を返して、トップとボトムのKを見せます。



カードをそろえ、cの位置からスタートして、時計まわりに1枚ずつ置いていきます。

「これは警備員ですが、彼はのぞき趣味がありました」と言って、スペードのKを4組の裏向きのカードの中央に置きます。「そして彼がこちらの部屋をのぞいたところ、何と女性たちが編み物をしていました」と言って、スペードの間でaとbのQを表向きに返します。「こちらの部屋では何と、男たちがポーカーをやっていました」と言って、スペードのJでcとdのKを表向きに返します。

* 備 考 *

当然ながら、カードマジックの手順は簡略化すれば必ず改善されるというわけではありません。簡略化の主旨は、観客が見るプロセスを少なくすることによって、行われたことをより明確に伝えようということです。しかし簡略化したために状態が伝わりにくくなることも起こり得ます。

私は、トロストバージョンで行われているように、表向きでカード全体の状況を見せてから、全体をひっくり返して、裏向きでカードをディールするという、多くのカードトリックでよく使われるプロセスが、あまり望ましいとは思っていません。表向きで見た状態が、裏返したときにはっきりわかるでしょうか。

私はつぎのようなプロセスを考えました。デッキからQとKを抜き出して、いま表向きで上がK、下がQとなっています。

パケットを裏返し、上の4枚をひっくり返して残りのカードの上に置きますが、そのとき上から2枚目のKの下にブレークを作ります。ここでブレーク上の6枚でブラウエアドオンを行います。すなわち、1枚ずつQを裏返していき、3枚返したときに残りのカードを置いて、最後の1枚を裏返します。そしてトップから4枚を右上から初めて時計まわりに置きます。

以上のプロセスなら、表向きのQを裏返してからそのままディールしたように見えますから、4枚のQを置いたことが明確に表現できます。どうせなら悪のりして、残りの4枚を置く部分も変更してしましましょう。

トップの3枚をプッシュオフしてから、突き出た右上コーナーを右手でつかみながら、トップの1枚を左に戻しボトムカードとそろえます。そして右手でつかんでいる2枚を右に抜いて表向きにダブルターンオーバーして、それがKであることを見せます。すぐ裏返し、上の1枚をテーブルの右上のカードの上に置きます。

つぎはトップカードをプッシュして、ボトムの2枚をダブルターンオーバーしてKを見せ、裏返し、上の1枚を左上のカードの上にのせます。残り2枚のうちの下の方の1枚を右手で右に引いて取り、ちらっと表を見せてすぐ裏向きにして、右下のカードの上にのせます。同時に左手を返してKを見せ、裏返して左下のカードの上にのせます。

以上でトロストバージョンと同じ状態になりました。

Part 4 2対4タイプ

2体4のタイプとは、2枚のQと4枚のK(もしくはJ)を使うものです。このタイプが現れて、ホテルミステリーは他のトランスポジショントリックとの味わいの違いが、明確に表現されるようになりました。このタイプのものが、今日における'ホテルミステリー'の標準的なものとなっています。

現象はつぎのようなものです。Qを1枚ずつ左右に置いて、女性が別々の部屋に入ります。それぞれのQの上に2枚ずつKを置いて、男性が2人ずつ女性のいる部屋に入ります。ここで警備員とか支配人などが部屋を調べに入ると、一方には2枚のQ、他方には4枚のKがあります。

このタイプにも、手法的には様々なバリエーションが登場しましたが、たんにカードのすり替え方が違うだけですから、あまり多くを記録に残す価値があるとは思えません。それらの中で、とくに洗練されたバージョンと、珍しいギャフバージョンを収録いたしました。

ダイヤ泥棒

= ピーター・ケーン、"Further Card Session with Peter Kane", 1975 =

この作品は、手法的に洗練されているだけでなく、ストーリーが秀逸です。原著ではストーリー部分が、方法とは別に書かれているので、その通りに翻訳します。それにもとづいて、うまくアレンジしてください。

* ストーリー *

ある有名な映画スターの女性が、4個の高価なダイヤを持っていて、それらを守るために2人の警備員を雇いました。2人の警備員は別々の部屋で、2個ずつダイヤを預かりました。ところが彼らはたらふく食べてワインも飲んだため、いつの間にか眠ってしまいました。目を覚ましたとき、何と彼らはひとつの部屋に閉じ込められていました。そして4個のダイヤは盗まれて、別の部屋に隠されてしまいました。

* 方法 *

デッキの中からつぎの6枚を抜き出して裏向きに重ねます。ダイヤの8、ダイヤの9、ダイヤの6、ダイヤの5、そして2枚の黒いJ。残りのカードは使いません。

6枚を表向きにビルドグリップに持ちます。左指でダイヤを1枚ずつ引いて、右手のカードを使って1枚ずつ左手に裏返して置いていきます。2枚目と3枚目の間に左小指でブレークを作ります。

4枚のダイヤを裏返したら、いったん右手の2枚のJを左手のカードの上に置き、ブレイク上の4枚を右手に取ります。上のJを左手で引いて取り、右手のカードで裏返します。右手のカードを左手のカードの上に置き、いちばん上のJを裏返します。(以上はブラウエアドオンです)。

Jが別々の部屋に入ると言って、トップカードを左に置き、つぎのカードを右に置きます。

左手の4枚を表向きにして、エルムズレイカウントを行います。そして裏返します。トップの2枚を押し出して、それら2枚を右手のビルドポジションにつかみ、それらを左手のカードの上でそろえる動作のとき、下の1枚を左手のカードの上に落としてしまいます。そして、2個のダイヤをこちらの部屋に置く、と言って、左のカードの上に右手の1枚を置きます。

残りのカードをダミコスプレッドなどの方法で2枚のダイヤに見せてから、そろえて右のカードの上に置きます。そうしたらすぐ左右の手を左右のカードの上にかぶせます。

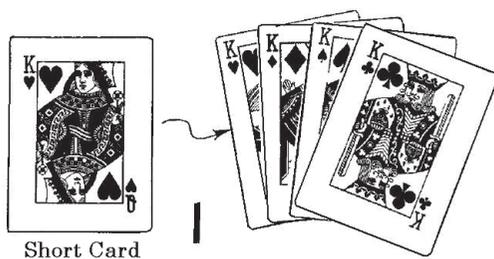
左右の手で魔法をかけ、そして左は2枚のJ、右は4枚のダイヤになっていることを、セリフをうまく合わせながら見せます。

ホテルミステリー・ギャフバージョン

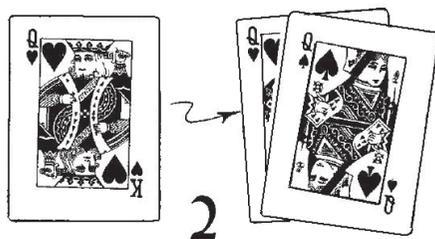
= ニック・トロスト、New Tops、1974年6月 =

* 準備 *

ハートのQの一方のインデックスをハートのKとしたもの1枚。これはエンドショートとしておきます。図1。これを3枚のノーマルなダイヤ、スペード、クラブのKの後ろに図のように置きます。4枚のKのように見えます。



ハートのKの一方のインデックスをハートのQとしたもの1枚。図2。これをノーマルなスペードのQの後ろに置きます。2枚のQに見えます。



方 法

2枚のQを図2のように広げて見せます。これが2人の女性で、ホテルの別々の部屋に入ったと話をし、テーブルの左と右の方に裏向きに置きます。置き方は、ノーマルのQを左、ギャフのQを偽インデックスを右上にして置きます。

4枚のKを前ページの図1のように広げて見せ、それらをそろえて裏向きに左手に持ちますが、偽インデックスを上に向けます。

右手で2枚の赤いKを取り、その間にスペードのQをすくって取ります。それらを広げた状態で表を相手に見せます。フェースがダイヤのK、中央がスペードのQ、バックにハートのKとなります。

それらを一時的に左手の黒いKの上のせ、それらをそろえるときに上の2枚だけをそろえて右手で取ります。これは下のカードがショートカードなので簡単です。その2枚をテーブルの左の方に置きます。

残りの3枚のいちばん下の1枚を左指先で左にずらし、2枚のように広げ、手を返して2枚の黒いKのように見せます。

右に置いてある偽のハートのQを2枚の黒いKの間にはさみ、サンドイッチ状態になったのを見せます。このパケットをそろえて右の方に置きます。

ホテルの警備員がやってきて、両方の部屋のドアをノックした、というような話をします。一方の部屋から2人の女性が現れ、他方の部屋から4人の男性が現れました、と言って、左の2枚を取り上げ、縦に返して表向きに広げて2枚のQを見せ、右の4枚を取り上げ、縦に返して表向きに広げて4枚のKを見せます。

オンリーザロンリー

= ルー・ガロ、"Richard's Almanac"、1983年7月 =

* 方 法 *

デッキから4枚のKと2枚の黒いQを抜き出します。残りのカードは使いません。表向きで下に2枚のQ、上に4枚のKとなるように並べ替えます。

6枚を裏向きにディーリングポジションに持ち、「この話にはあなたもちょっと参加してもらいます。2人の女性と4人の男性の話です」と言います。上から1枚ずつスタッドディールのやり方で表向きにディーリングしていきませんが、1枚目のKを置くとき、少し手前にジョグしておきます。6枚を取り上げ、横に裏返します。(訳注:スタッドディーリングとは、右手の甲を上にしてトップカードをつかみ、カードを縦方向に表返して置くやり方です)。

右手でポケットをビドルポジションにつかみませんが、インジョグカードをそろえるときその下にブレークを作ります。左手の親指をトップカードに当てて、右手を右に運び、トップカードをスリップさせて、トップから2枚目と3枚目を右にクリアさせ、それをふたたびポケットの上に置きます。トップから3枚目の下のブレークは維持します。

以上の動作を行うとき、「この2人の女性はユニークなタイプでした。自由奔放とでも言われるような」と言います。

「あなたはホテルの支配人だとして、彼女たちがホテルに入ってくるのを見ていました」とセリフを続けながら、上の1枚を左手で引いて、左手のポケットの上に斜め上に取ります。図1。その状態で左手を返して、Qの表を見せます。すぐ左手をもとに戻し、そのカードをいま左手があるあたりの少し左のテーブルに裏向きに置きます。

右手を返してQの表を見せ、裏向きに戻して左手のポケットの上に置きます。続けて右手をテーブル上のカードに運び、そのカードを図2のように右にずらし、そして左手はトップカードを押し出して、そのカードの左隣りに置きます。その動作は、「彼女たちは別々の部屋に入りました」と言いながらやります。

「しばらくすると2人の男性が入ってきました」と言いながら、左手のポケットを右手のビドルポジションにつかみ、少し持ち上げます。左手の指先でボトムカードを1.5cmほど左に引き出します。すると左指先がボトムから2枚目の表に触れますから、それら2枚を同時に左にずらして、図3の状態とします。

いちばん下の1枚を左手に残して、見かけ上の上の2枚を右手で持ち上げ、右手を返して2枚のKの表を見せます。右手をもとの向きに戻して、いかにもずれている2枚を左手のカードの上でそろえる振りをして、上の1枚だけを取り、テーブル上の右のQの上に置きます。そのとき、「この2人の男性は1人目の女性の部屋に入りました」と言います。

「あとの2人の男性は2人目の女性の部屋に入りました」と言って、右手で残りのカードをビドルポジションにつかむとき、左手指先でボトムカードを左にずらし、その状態で右手を返して2枚のJを見せ、右手を戻してカードをそろえ、それらを左のQと思われるカードの上に置きます。

たとえさえないホテルの支配人でも、自分のホテルでこのようなことが行われるのは、あなたは許せないはずです。あわててひとつ目の部屋に行って、部屋に入りました。ところがそこではいまわしいことを行われていませんでした。2人の女性が編み物をしていましたし、もうひとつの部屋では、4人の男性がポーカーをプレイしていました」と言います。

「ほらご覧ください。こちらが2枚のQで、こちらが4枚のKです」というセリフに合わせて、はっきりと右の2枚を返して広げて2枚のQを見せ、左のカードを返して広げ、4枚のKを見せます。

Part 5 2対3タイプ

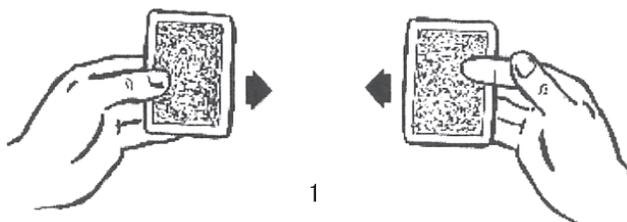
ホテルダレイ

= ピーター・ダフィ&ロビン・ロバートソン、“Card Conspiracy 第1巻”、2003年 =

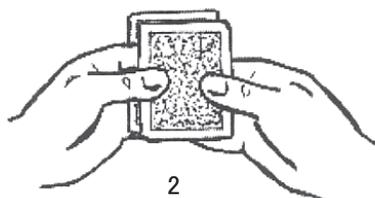
* 技法 ダレイズディライト *

左右の手にそれぞれパケットを持ち、左右の手を交差させて右手のパケットを左に、左手のパケットを右に置いたと見せて、途中で両パケットが重なったときにすり替えを行うという技法です。

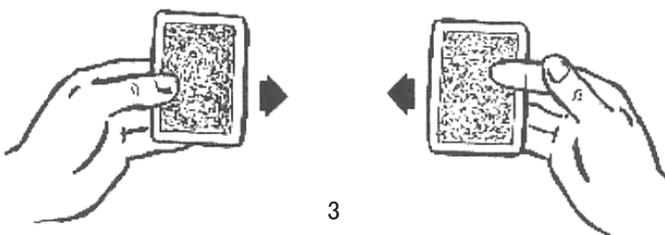
図1のように左右の手にパケットを持ちます。左手は親指と人さし指の間、右手は人さし指と中指ではさんでいます。



両手を交差させるべく近づけますが、右手のパケットを左手のパケットの下に運び、図2のように2つのパケットが重なったとき、右手のパケットを左手の人さし指と中指でつかみ、左手のパケットを右手の親指と人さし指でつかみます。



そして両手の動きをそこで止めることなく、図3のように両手を交差させて、それぞれのパケットをテーブルに置きます。



* 方法 *

デッキを表向きに広げて、2枚の赤いQと3枚のK(黒が2枚と赤が1枚)を抜き出します。残りのカードは使いません。

2枚のQを表向きに取って「女性が2人います」と言って、左手に渡します。「そして男性が3人います」と言って、Qの上に3枚のKをのせますが、赤いKが3枚のKの中央にくるようにします。「赤いKが男性の中のリーダーです」と言って、赤いKを裏向きにしてもとの位置に入れます。「彼らはあるホテル入りました。3人の男性がひとつの部屋、2人の女性が別のひとつの部屋をとりました」と言います。

上記のセリフを言いながら、カードをそろえて右手のビドルポジションに持ちます。そして3枚のKを左手で引いて取りますが、2枚目の裏向きのKの下にブレークを作り、3枚目のKを取るときに右手のカードの下にスチールします。すぐに左手を返して左手の3枚のKとされている2枚を裏向きにテーブルの左の方に置いて、「男性はこちらの部屋に入りました」と言います。上のQを左手に引いて取り、その上に残りの2枚を重ね、裏向きにしてテーブルの右の方に置いて、「2人の女性ははこちらの部屋に入りました」と言います。

左のカードを左手に、右のカードを右手にダレイズディライトの位置に取り上げます。「3人の男性が2人の女性の部屋に忍び込みましたが、同時に2人の女性が男性の部屋に忍び込みました。ですから男性と女性が入れ替わってしまいました」と言いながら、ダレイズディライトを行って2つのポケットを左と右に置きます。そしてすぐに両方のポケットを広げると、左は2枚の裏向きのカード、右は2枚の裏向きの間に1枚のKが表向きになっています。

「お互いの部屋が空っぽだったので、リーダーのKはすぐに2人の女性を独り占めしようと、反対の部屋に戻りました」と言って、右のポケットの中の表向きのKを抜いて、左の2枚の裏向きのカードの間にはさみます。

「すると女性のいる部屋からにぎやかな笑い声が聞こえてきたのです。ただしリーダーが忍び込んだ部屋からではなく、反対の部屋からです」と言って、右の2枚を表向きにして広げます。そして左の3枚をひっくり返して広げ、「こちらはもと通り男性ばかりになってしまいました」と言います。

Part 6 原点に戻る

‘ホテルミステリー’の原点と思われる“Secret Out”(1859年)に解説された‘ある夜の宿屋の出来事’(Like with Like, or How to Keep a Hotel)は、手法的にはつぎのような原始的なものです。

4枚のJを別々の位置に置いたあと、それぞれのJの上に、A、K、そして最後にQをのせたあと、それら4組のパイルをいったん重ねて集め、それからまた4組に配ることによって、J、A、K、Qが4枚ずつ集まります。

初心者向けのカードマジック入門書に書かれているようなトリックではありますが、4組を集めたあとに適切なフォールスシャフルを挿入してやれば、いちおうはマジックとして成立します。いずれにしても、現象としてはホテルトリックの典型的なものとして、現代でも十分にエンタテインメント価値があるものです。

そのように考えながら、‘ホテルミステリー’特集の編集の最後の最後になって、その現象をうまく実現できる手法を思いつきました。‘コンビネーションストリッパー’を使えばよいのです。まさに今年の課題である、‘パケットトリック’作品の考案のひとつとして見事にまとまりました。皆さんも、パケットトリックとしてぜひ作って演じてください。

ある夜の宿屋の出来事・パケット版

= 加藤英夫、2014年1月15日 =

* 準備 *

J、A、K、Qをそれぞれ異なるタイプのコンビネーションストリッパー加工します。

* 方法 *

‘Like with Like, or How to Keep a Hotel’の原案の現象説明に書かれているように進めて、4組にディールしてそれらを集めたあと、縦方向に抜いて8枚と8枚に分けたあと、横方向抜いて4枚ずつに抜いて置きます。そしてJ、A、K、Qが別々に集まったことを見せます。

加藤英夫のホームページ

<http://www.magicplaza.gn.to/>

Card Magic Magazine 第 22 号

発 行 2014 年 2 月 14 日

著 者 加藤英夫

発行者 加藤英夫

hae16220@ams.odn.ne.jp

